

乙 貞

第95号 通巻17巻第4号
1997年11月30日 発行

守山市立埋蔵文化財センター
☎077-585-4397

☎524-02
守山市服部町2250番地

☆準構造船部片が出土！

下長遺跡（古高町）から準構造船の部片が出土しました。前号の乙貞でも報告した儀仗（^{ぎじょう さしばじょうもくせい} 髻状木製品）と同じ第17次発掘調査地（^{きゅうかどう} 旧河道）から見つかったものです。

準構造船とは、縄文時代から使われている「丸木舟」とは異なり、丸木舟を船底にし、複数の部材（^{ふなぞこ} 船底）を組み合わせ積載量を増した船のことをいいます。船首に取り付けられた舳先（^{へさき} 舳）と船底部に舷側板（^{せんていぶ} 船縁）（^{げんそくばん} 船縁）を組合わせた部片など計3点が今回見つかりました。古墳時代前期に使われていたと考えられ、全長約6mほどの船であったと推測できます。

舳先を除き、他の2点は全体から見れば、極わずかな部片にすぎませんが、準構造船の出土は全国でも数少なく、更に、船底部に舷側板が組合わさった状態で見つかったのは初めてのことです。

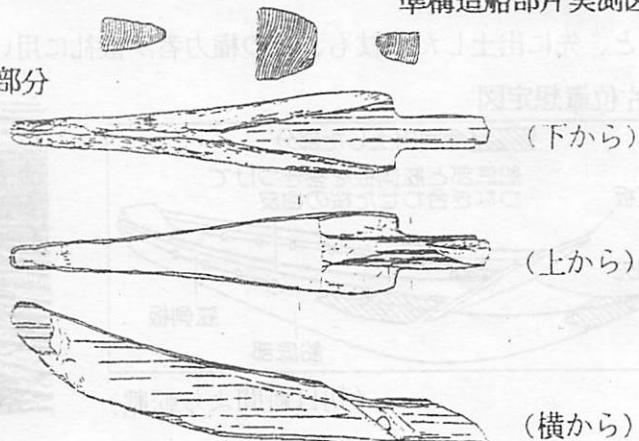
図のように、舳先はほぼ完形で、現存長約64.5cmを測ります。出納（^{でぼ}）を削り出して本体に装着したことも分かります。

また、船底部と舷側板は長さ約93.5cm、上下約7.9cmが残っていて、二つの部材に四角形の孔（^{あな}）をあけ、幅2.4cmの桜の樹皮（^{ゆる}）を二重に巻いて結合し、緩まないように上下2カ所に楔（^{くさび}）を打ち込んでいるのがよく観察できます。この他に船底部に削り込まれた溝（^{なでいた}）には、^{たていた} 縦板がはめ込まれていたと考えられます。

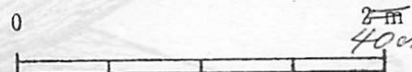
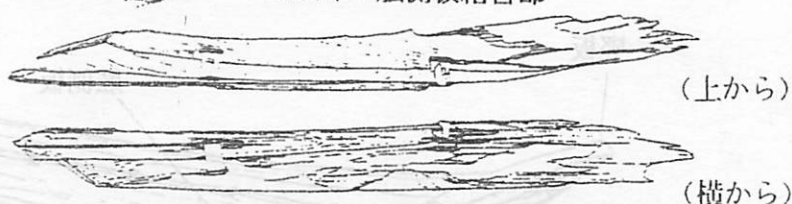
古墳時代の琵琶湖を舞台にした湖上交通に使われていた船を考える上で大変貴重な資料です。（2頁に関連記事）

準構造船部片実測図

舳先部分



船底部+舷側板結合部



「乙貞」は服部遺跡の調査で出土した銅印（^{どういん}）に刻まれていた文字で、奈良時代末頃のものと思われます。大きさは約3.3cm × 3.3cm、高さ約4.2cm、重さ約75gです。この銅印は公印（^{こういん}）として使用されたものではなく、個人印として使用されたものと考えられます。

☆下長遺跡出土の準構造船を考える

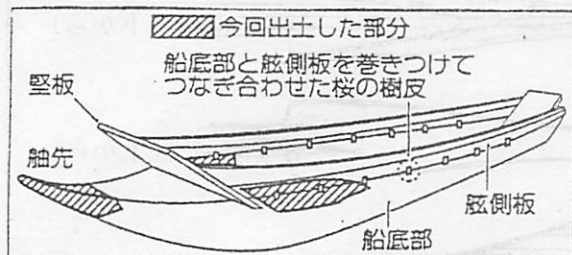
今回、下長遺跡で古墳時代前期の準構造船の部片が3点見つかりました。そのうち、注目されるのが組合わさった状態で見つかった船底部と舷側板です。八尾市久宝寺遺跡出土の船から組み合わせの方法はある程度想定されていましたが、今回の出土資料はこのことを証明するもので、今まであまり多くのことが分かっていなかった準構造船の造船技術を知るうえで重要な発見です。

次に、準構造船の出土は現在全国で7遺跡で確認されているだけで、そのうち滋賀県内での出土が、米原町入江内湖遺跡、彦根市松原内湖遺跡、近江八幡市長命寺湖底遺跡、そして下長遺跡と4遺跡を数え、このことから、琵琶湖での湖上交通が古墳時代にも活発であったことがわかります。

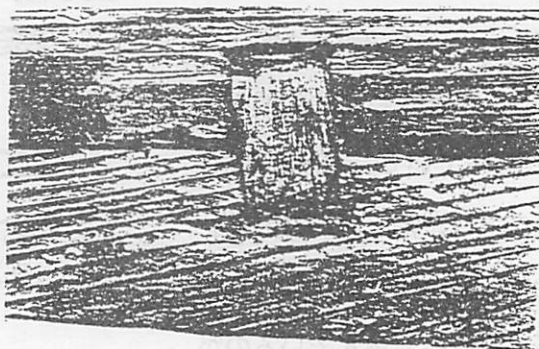
古代より滋賀県は交通の要所であり、湖上交通も活発であったと考えられています。今回の準構造船の出土はそれを証明する資料と言えます。

部片が出土した下長遺跡は、現在の琵琶湖岸から約3.5km内陸部に位置しています。少なくとも古墳時代前期には湖上はもとより、河川を通してかなり内陸まで物資の運搬に船が利用されていたことがうかがわれます。陸揚げされた物資は、再び陸路で周辺の集落に流通していたのでしょう。拠点集落であった下長遺跡は物資流通の窓口でもあり、それを掌握していたのはここに住まいした権力者で、そう考えると、先に出土した儀杖も、この権力者が儀礼に用いた持ち物と考えることができます。(岩崎)

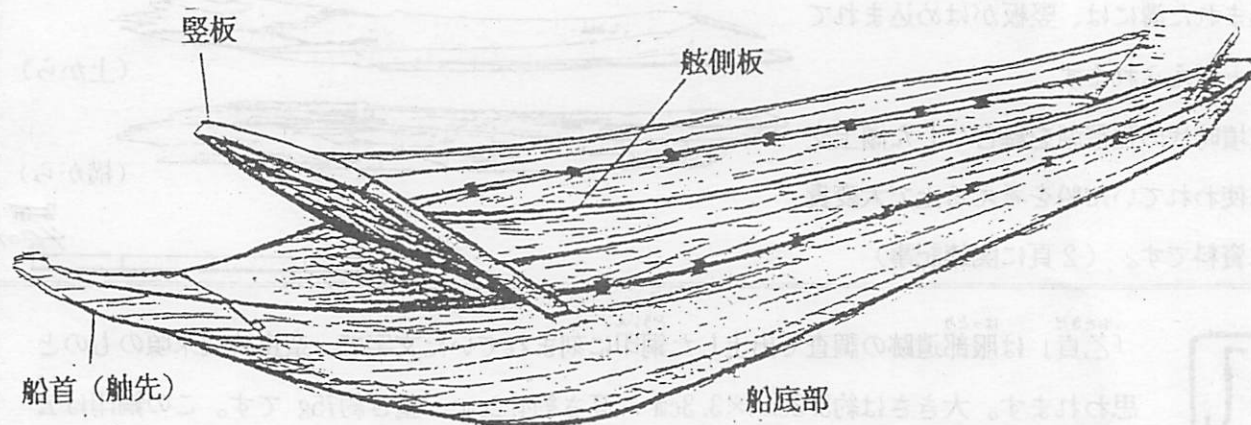
部片位置想定図



(朝日新聞より転載)



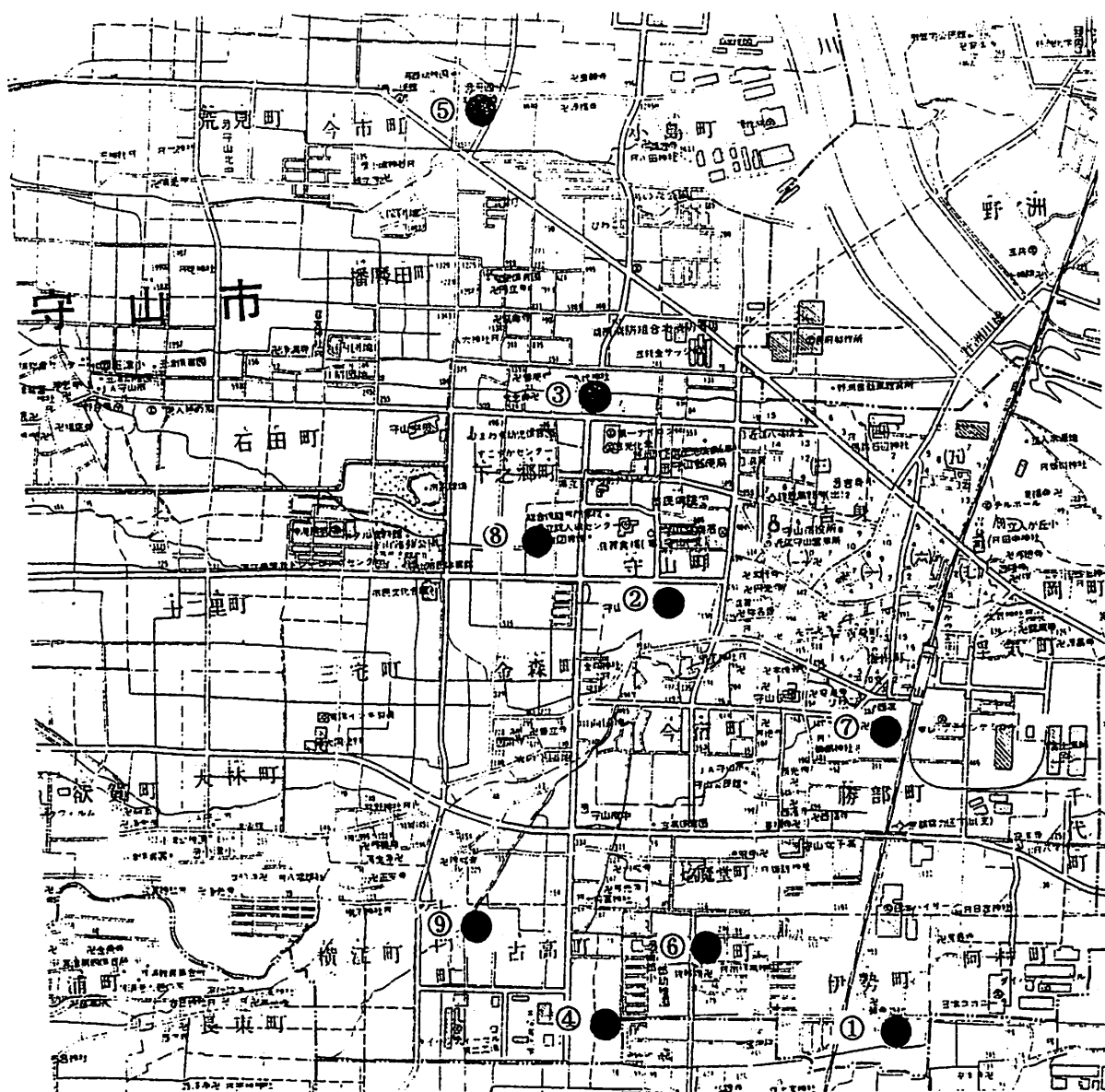
船底部 + 舷側板結合部拡大写真



▲下長遺跡出土準構造船想像復元図(中井純子画)

§ 発掘調査だより §

No.	遺跡名(調査回数)	調査地	調査期間	調査面積	担当者
①	伊勢遺跡(第44回)	守山市伊勢町	H9 10/8~11/6	約220㎡	中村
②	金森東遺跡(第12回)	守山市守山町字小森町・字太田・字大澤	H8 10/22~(継続)	約8000㎡	小出
③	下之郷遺跡(第25回)	守山市下之郷町字見田	H9 9/29~(継続)	約2300㎡	川畑
④	塚之越遺跡(第13回)	守山市古高町字水押	H9 4/23~(継続)	約6500㎡	畑本
⑤	長塚遺跡(第6回)	守山市小島町	H9 11/6~11/11	約870㎡	大岡
⑥	二町鏡遺跡(第9回)	守山市二町町字堂ノ内	H9 9/25~11/19	約1300㎡	小島
⑦	吉身北遺跡	守山市勝部町字松塚	H9 8/18~(継続)	約1600㎡	佐々木
⑧	吉身西遺跡(第85回)	守山市守山町字七ツ枝	H9 7/22~(継続)	約2500㎡	藤原
⑨	下長遺跡(第17回)	守山市古高町字浮	H9 9月14~27	約8000㎡	岩崎

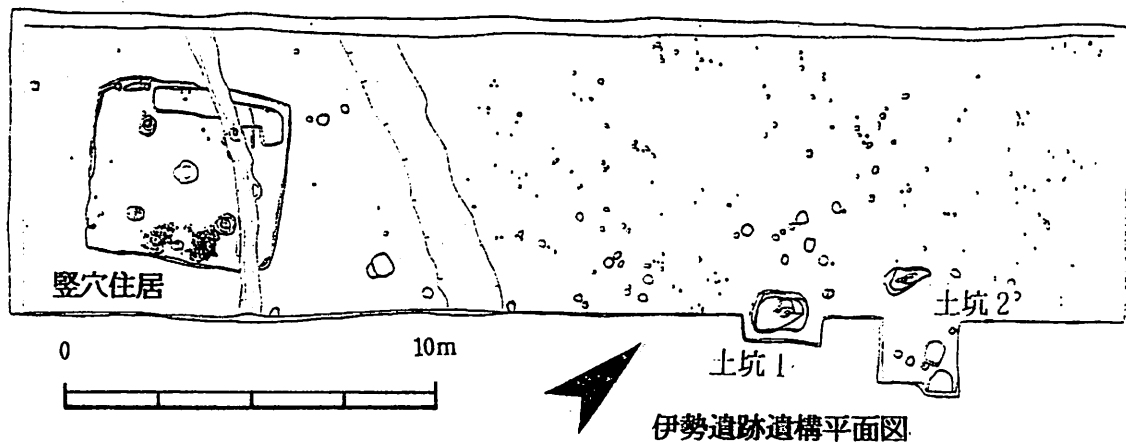


①伊勢遺跡（第44次調査）

伊勢町の土地区画整理事業地の一角で、発掘調査を行いました。その結果、溝2条、^{たてあなじゅうきょ}竪穴住居1棟と土坑、ピットなどが見つかりました。竪穴住居の規模は一辺5.4×4.7mの規模で、支柱穴が4本あり、周壁には溝がめぐり、南東辺中位には土坑が配されています。この土坑の回りは砂礫で盛り固められていました。この竪穴住居からは土器のほか磨製石鏃が出土しました。住居の時期は出土した土器から弥生時代後期と考えられます。

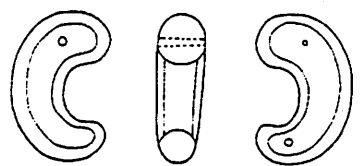
また、土坑1は1.6×1.1m、深さ0.7m、土坑2は1.1×0.7m、深さ0.5mを測ります。この調査区の隣り北東側から大型掘立柱建物が見つかっており、これらの土坑も大型掘立柱建物の柱の可能性もありますが、遺構が調査区外に広がっているため今は可能性の段階で留めておき、今後の調査に期待したいと思います。

（中村）



②金森東遺跡

今回は、住居跡から出土した勾玉について報告します。勾玉は、比較的大きなもので乳白色を呈し、全体が丁寧にみがかれています。石の材質はメノウと思われます。メノウは遠く山陰地方などでとれる石なのですが、近江の地で暮らしていた人と直接もしくは間接的に交流があったという1つの可能性を示しており、注目されます。なお、時期に関しては、出土した土器から古墳時代中期末頃のものと考えられます。



$S = 1/2$

（小出）

③下之郷遺跡（第25次調査）

市立図書館前の道の延長で、播磨田町の区画整理地へ抜ける道路の建設に先立って、10月初めより下之郷遺跡の調査を始めました。下之郷遺跡は、弥生時代中期の集落遺跡で、ムラのまわりには3～5条もの深い壕が堀り巡らされています。これまでに24回ほど調査がされていて、壕のなかには土器や木器、石器、それから当時の自然環境を復元するうえで重要な動物、植物、昆虫などが大量に埋まっています。今回調査している場所は、遺跡の外側から内側にかけて、延長約100mの帯状の道路部分にあたります。

現在までに検出した範囲では、幅5～8m程の大きな溝が5条ほど見つかっており、その内数本は、

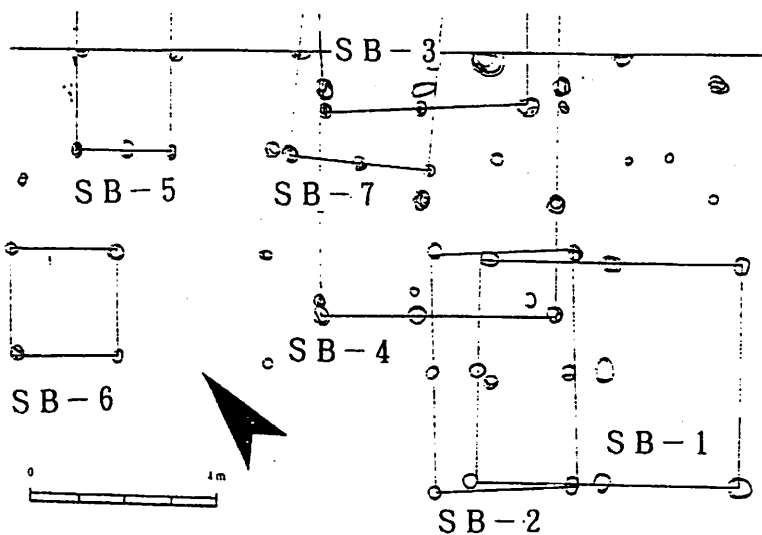
ムラをとりまく環濠にあたるものと推定されます。

(川畑)

④塚之越遺跡（第13次調査）

現在、全体の約80%が終わりつつあります。生活跡は、^{あんかつしよくねんど}暗褐色粘土が堆積する落ち込み状の^{かそういこう}下層遺構と、この暗褐色粘土の上にある^{じょうそういこう}上層遺構とに分けられ、すでに上層遺構の調査が終了しています。

上層遺構では北東寄りに遺構が集中しトレンチに沿うように掘立柱建物（SB）と7棟検出しました。全体のわかる建物は3棟だけで、それ以外は調査区外へと広がっていきます。建物は方位と重複の状況から4時期程度考えられます。



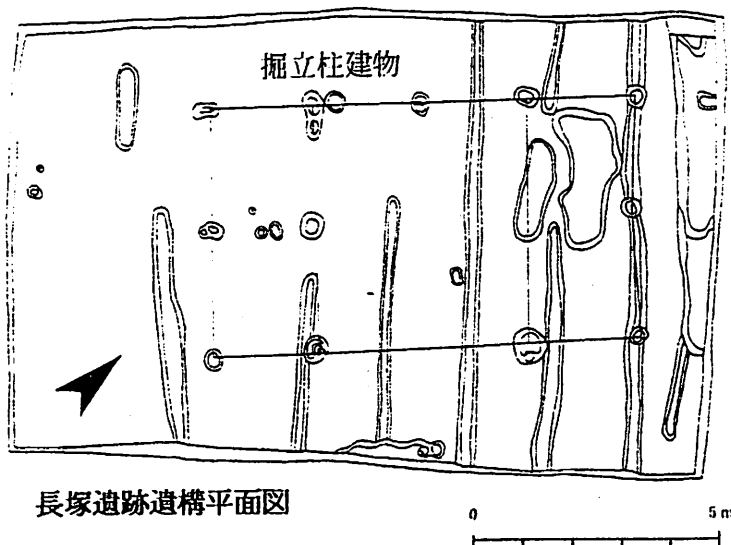
塚之越遺跡遺構平面図

現在の水路を挟んだ北東側には第93号でお伝えした建物群があり、今回の掘立柱建物はこれらと同じ建物群になると思われる、時期は13世紀後半～14世紀頃と考えられます。

下層遺構は暗褐色粘土を埋土とした溝や土壌、ピットを検出しており、溝からは古墳時代前期の遺物が出土しています。調査中の下層については、次号でお伝えしたいと思います。(畑本)

⑤長塚遺跡

河西小学校正門前の水田で調査を実施しました。古代末～中世にかけての耕作跡とピットを検出しました。ピットは等間隔に並んでおり、掘立柱建物と考えられます。また遺構が見つかった地層の上には部分的に砂を層状に含む粘質土が厚く堆積していたことから過去に洪水があったものと考えられます。(大岡)

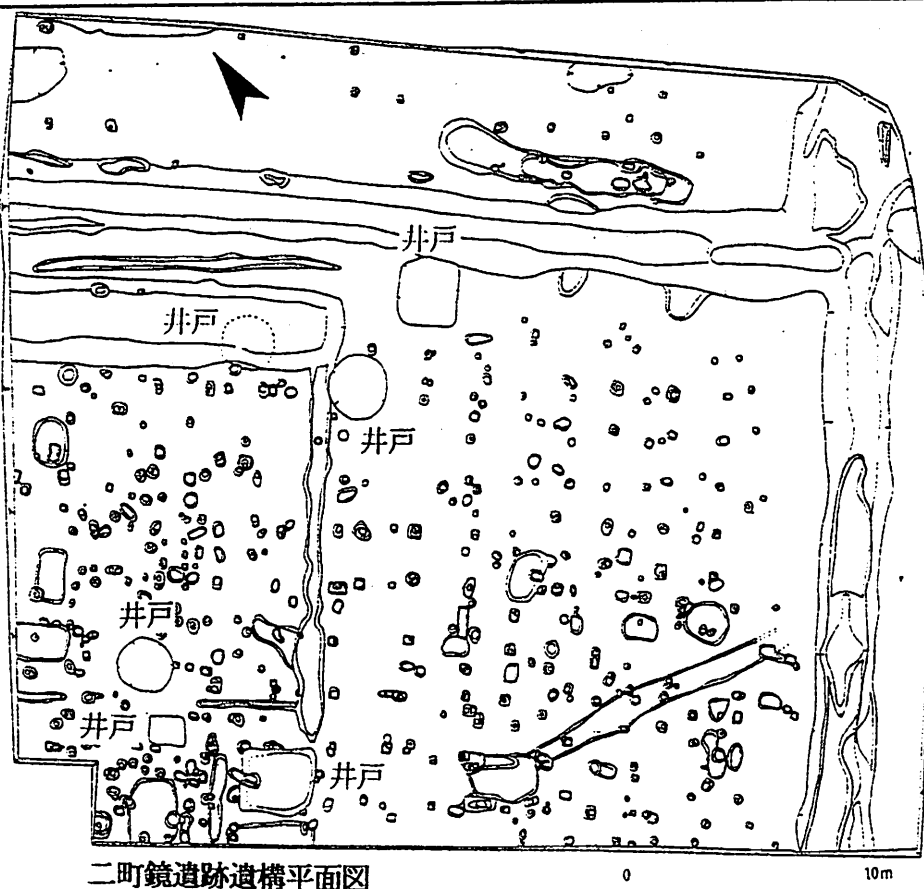


長塚遺跡遺構平面図

⑦二町鏡遺跡（第9次調査）

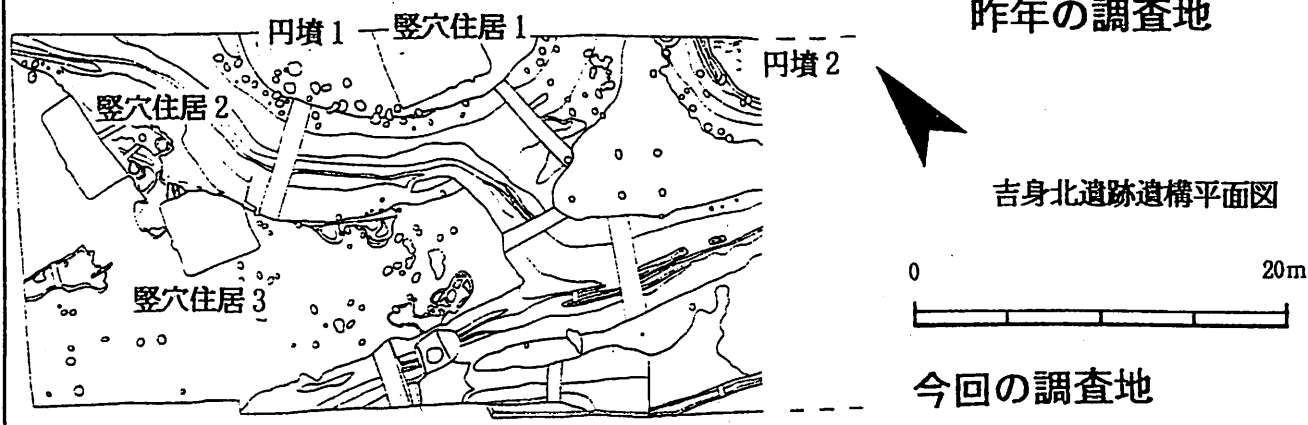
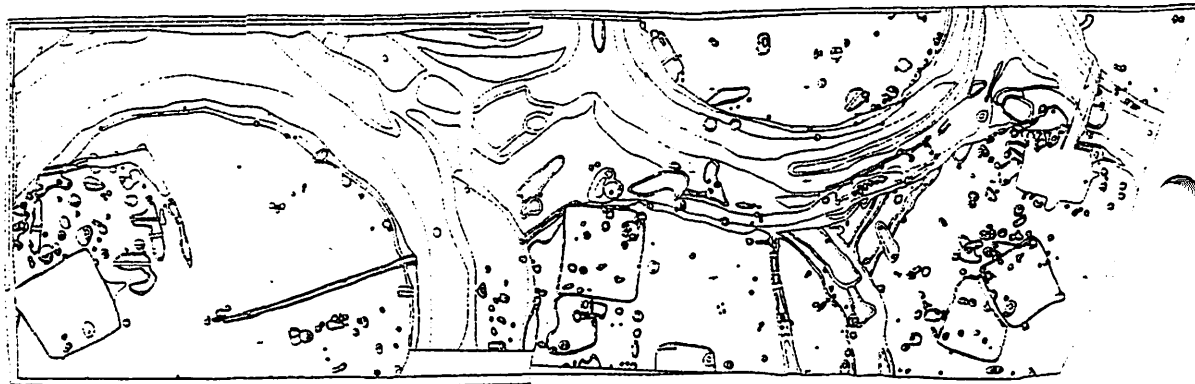
二町鏡遺跡は中山道の西200m程の位置にある中世の集落遺跡です。今回の調査では、上層で古墳時代後期の溝1条と溝に囲まれた中世の屋敷地、下層で弥生時代後期の溝と時期不明のピット群を検出しました。中世の屋敷地からは掘立柱建物群や井戸などが検出され、多量の土器のほか木製箸や漆器なども出土しました。

中世の集落規模はこれまでの調査から約1町半四方と考えられ、その範囲を幅2～3mの溝で整然と区画割りしていると考えられます。区画割りされた屋敷地はこれまでに9区画が検出されており、それぞれから掘立柱建物や井戸などが見つかっています。集落の年代は出土遺物から13世紀後半から14世紀代と考えられます。(小島)



⑦吉身北遺跡

吉身北遺跡は、JR守山駅の西側に広がる弥生時代中期から平安時代にかけての集落跡であり、なかでも、古墳時代中期から後期にかけては、竪穴住居が30棟以上、古墳が5基見つかっていて両者の関係



が注目される遺跡です。

今回の調査では、これまでに竪穴住居3棟、古墳2基、溝が3条見つかりました。住居の規模は一边が4～5mで、出土した遺物には製塩土器^{せいえんどき}が含まれており、海に面した地域との交流がうかがわれます。時期は5世紀中頃と考えられます。古墳は調査区の端で見つかり、昨年の調査に続く古墳の一部であることが分かりました。周溝^{しゅうこう}からは埴輪^{はにわ}の破片が1片も見つかっておらず、墳丘の斜面には多数のピットが見つかり、埴輪にかわる何かが立てられていた可能性があります。時期は出土した土器から5世紀末～6世紀初めにかけ築造されたと考えられます。その後掘られた溝のうち1条は古墳の周溝^{しゅうこう}を利用し、溝を掘削する労働力^{ろうどうりょく}を軽減していることが分かります。

今後も調査は続きますので、次号でまとめて報告します。

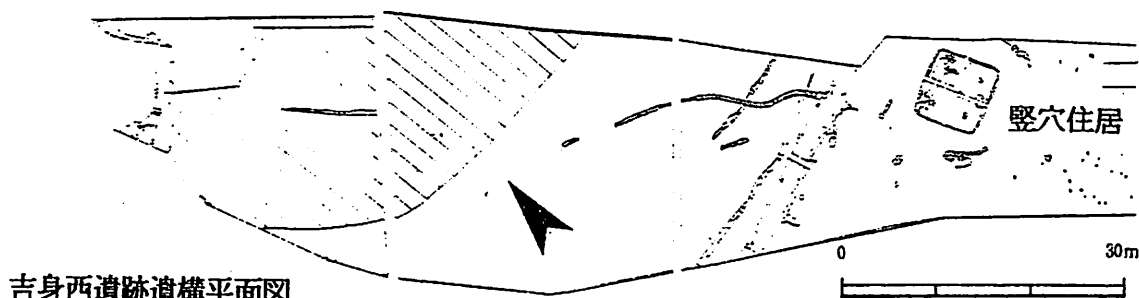
(佐々木)

⑧吉身西遺跡(第85次調査)

10月初めにA地点の調査が終了しました。集落の端にあたる地点ということで、遺構の密度は少ない状況でした。調査地からは、柱穴と弥生時代後期の竪穴住居1棟と古墳時代の溝が見つかりました。竪穴住居は周辺で見つかりしているもの(約5×6m)に比べて、ひとまわり大きい(約7×7.5m)ことから、周辺の住居とは少し違う性格をもつものと考えられます。この住居の埋土からは、打製石鏃^{だせいせきぞく}が1点見つかりました。

また、調査地の北側の斜線部分は水田跡の可能性があり、時期は分かりませんが、溝と同じ時期ならば、溝は水田へ水を供給^{きょうきゅう}する役目をしていた可能性があります。

(藤原)



吉身西遺跡遺構平面図

【埋蔵文化財センター歴史入門講座のお知らせ】

平成9年も多数の発掘調査が行われました。その中には貴重な発見もあり、新聞紙上をにぎわした遺跡も少なくありません。

歴史入門講座も今回で最終回をむかえます。今回の歴史入門講座では平成9年の発掘調査の成果を皆さんにお伝えしたいと思います。多数の御来館をお待ちしております。

日時： 12月20日(土) 10:00～

※お問い合わせは守山市立埋蔵文化財センターまで

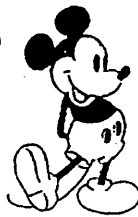
☆ものの^う移り^かわり^り

～ミッキーマウスの例から～

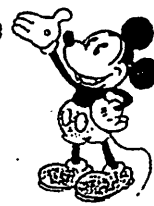
①



②



③



④



© Walt Disney Productions

上に4枚のミッキーマウスの絵があります。古いものと新しいものがバラバラに並んでいます。みなさんは、この絵を古い^{じゅんばん}順番からに並べかえることが出来ますか？それでは一緒に^{いっしょ}考えてみましょう。

まず、ズボンについているボタンに注目してください。すると、ボタンの付いていない①と、ボタンの付いている②③④に分けることが出来ます。

次に、②③④の目に注目してください。②では真っ黒に塗りつぶされていますが、③では切り込みが入られ目の黒い部分と白い部分を表現しています。そして④では黒い部分と白い部分とが分けられています。ですからここで②→③→④（もしくは④→③→②）という^う移り^かわり^りを読み取ることが出来ます。わけです。それでは①は②→③→④（もしくは④→③→②）とどのような関係になるのでしょうか。やはり目に注目するならば、①と④の目がとてもよく似ていることに気が付きませんか？ですから①→④（または④→①）という流れを組み立てることが出来ます。

このように、ズボンの“ボタン”や“目”に注目することによって、上の4枚のミッキーマウスの絵が②→③→④→①（または①→④→③→②）というように^う移り^かわり^りがわかっていくことがわかるわけです。ちなみに、それぞれそのミッキーマウスの絵がいつ頃描かれたのかタネあかしをすると、①は1950年代以降、②は1928～30年代後半、③は1930～40年代前半、④は1940～50年代のものです。ですから古いものから並べかえると②→③→④→①となるわけです。

ところで、私たちは発掘現場でよく「こっちの土器の方が古いなあ」といったことを口にしますが、その背景には、土器に対しても上のミッキーマウスで見たのと同じような考え方をしているということです。出土した土器に〇〇〇年と年代が書かれていることはほとんどありませんし、土器と一緒に出てくる他のものにも同じことが言えます。ですから私たちは今から何年前ということがわからないものに関しても、ものにあらわれた色々な要素に注目することにより、そのものが移り変わっていく様子を明らかにしていくのです。でもその時に、変化のない要素に注目しても何もわかりません。先ほどの話に戻りますが、ミッキーマウスの手や耳といった要素に注目してもほとんど変化がないということに気が付きませんか？土器もしかり。形や文様といった見た目の違いだけでなく、どのようにして作られたのか、どのように使われたのか、そして何で出来ているのかといった色々な要素に注目しながら、変化していく要素・しない要素を見抜くことが大切なのです。みなさんも今度、博物館や遺跡説明会などで土器を見る機会に遭遇したら、「うわ～、すごいなあ」というだけでなく、「自分が同じものを作る時はどうするかな」ということを考えてみてください。人が作ったものである以上、必ず何か違いが見付けられるはずですよ。（ミッキーマウスの絵「文藝土器大図」第4巻 泉 餘 公紙の文庫から引用）

（小出）